二次元ぷち文庫

破魔の霊刀

汚された美少女剣士

表紙イラスト：舞猫ルル

天草白

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『破魔の霊刀　汚された美少女剣士』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

はまれいとう

破魔の霊刀

汚された美少女剣士

天草白

表紙／舞猫ルル

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

多岐神弥生（たきがみやよい）

真面目な性格の美少女剣士で、女だてらに毎日の剣の稽古を欠かしたことがない。天賦の才を持っていて、その剣腕は並みの男を遥かに凌ぐ。破魔の家系の末裔。

雷丸（いかずちまる）

道場破り集団の頭領。欲望の赴くままに生きる男で、その正体は魔物。配下の魔物を率い、暴力の欲求を満たすために道場破りを繰り返している。

「頼もう」
ぶっきらぼうな口調とともに道場の戸口に現れたのは、十数人のむさ苦しい男たちだった。いずれも編み笠に着流し姿で、いかにも浪人という風体をしている。
「当方に何用か？」
多岐神弥生は艶やかな黒瞳に凛とした闘志をこめて、浪人たちを見据えた。
青い小袖に黒い袴という剣士らしい素朴な服装と、それにそぐわない十代後半の乙女の可憐な美貌という取り合わせが意外だったのか、浪人たち皆一様におやという顔をする。
「我らは『雷神組（らいじんぐみ）』と申す。多岐神一刀流の道場とお見受けした。道場主にお目通り願いたい」
おそらくは彼らの頭領なのだろう、先頭に立つ四十がらみの男がしわがれた声で告げた。
雷神組とは最近噂になっている無法者の集団だ。ここ江戸の城下町では、将軍吉宗が武芸を奨励する政策を取っていることもあり、とみに剣術道場が栄えていた。
そして、そんな道場を狙って道場破りもまた横行していた。彼らは半ば襲撃同然に道場の代表者に勝負を挑み、勝った暁には道場の看板か、あるいは幾ばくかの金子をせしめていく無法者たちだ。
「うちの道場がそんな連中に目をつけられるとは……」
弥生はひとりごち、物騒なご時世だとため息をついた。

――多岐神一刀流は戦国期から続く古い剣術道場だ。
かつては妖怪を祓うことを生業にしていたらしい、と今は亡き父に聞いたことがある。由緒正しき家柄だ、と父は誇らしげに語っていた。
もっとも道場の一人娘である弥生は、
「天下泰平の世に妖怪も物の怪もないけれど、ね」
常からそんなふうに思っていたものだが。
弥生の父である多岐神権左（ごんざ）が当主を務めていたこの道場は、しかし父の病死をきっかけに数十人もいた門下生は次々と離れていき、今では四人しか残っていない。
父の遺志を継いだ弥生が現在は道場主の代理を務め、残った門下生を教えてはいるが、彼らからの月謝だけで道場が立ち行くはずもなく、家計はすでに火の車だ。
「聞こえなかったか、女。道場主を出せと言っている。我ら方々の道場を巡り、腕を磨いておるのだ。そちらも剣術道場を名乗るなら、仕合ってもらおうではないか」
頭領らしき男が侮蔑をこめた笑みを弥生に浴びせた。
「無論、黙って看板を差し出すと言うのなら、それはそれで構わぬが」
「……差し出すつもりなどない」
あからさまな嘲笑に対し、さすがに弥生も表情をムッと険しくした。
「わたしは当道場の師範代、多岐神弥生。貴方たちとの試合、謹んでお受けしましょう」

道場の武者窓から吹きこんだ風が、腰のあたりまで伸びた漆黒の髪を緩やかになびかせる。

「なんだ、この女が師範代だと？」

「おい、女。剣術は女子供のお遊びではないぞ」

「俺たちが本物の剣術というものを見せてやろう」

威嚇するように、浪人の一人が土足のまま道場に足を踏み入れる。

刹那――。

「がっ！」

稲妻にも似た軌跡が駆け抜け、男は苦鳴を上げて倒れこんだ。

弥生が、手にした竹刀を目にも止まらぬ速さで一閃し、不埒な男の足を打ち据えたのだ。

「神聖な道場に土足で上がるとは何事か！」

一喝すると、さしもの荒くれ者たちも言葉を失った。

「剣の作法もわきまえぬ不埒者ども、返り討ちにしてくれる」

浪人たちがいっせいにざわめき、憤怒の視線を浴びせてくる。

弥生も動じず、その視線を平然と受け流す。

たとえ相手が何人いようと、弥生はこの道場を父から受け継いだ当主である。まして作法も知らない連中に対し、一歩も引く気はなかった。

「さあ、次は誰かしら」
弥生は静かに竹刀を構えなおし、浪人たちに言い放った。
さすがに数人と続けざまに戦ったせいで、息が荒い。それでもなお凛々しい表情を崩さず、気丈に浪人たちを見据えた。
……弥生の実力は圧倒的だった。
まだ二十歳にも満たない乙女でありながら弥生はすでに目録の腕前である。荒くれ者ぞろいの浪人たちもそれなりに腕に覚えがあるようだが、弥生はその数段上をいく。いずれの男たちも二、三合でたたき伏せていた。
（たとえ何人来ようとも、この程度の相手ならわたしの剣術のほうが上――）
自らの実力に確かな手ごたえを感じながら、弥生は残る男たちをにらみつけた。
立て続けに試合を重ねたことで、青小袖の下はうっすらと汗ばみ、純白の首筋や鎖骨に沿って汗の珠が流れ落ちる。
少女とは思えないほどたわわに実った左右の乳房は、剣術には邪魔でしかなく、弥生はサラシを何重にも巻いて固定していた。ただ深い胸の谷間に汗が溜まるのはどうしようもなかったが。
「おのれ、小娘……！」

さすがの浪人集団も弥生の剣腕に恐れをなしたのか、新たな挑戦者は誰も現れない。どことなく怯えた顔つきの浪人たちに対し、弥生が凛とした口調で言い放つ。

「どうやら噂の『雷神組』も評判倒れだったようね。これに懲りて無法な真似はおやめなさい」

「――情けない奴らよ、まさかこの儂の手を煩わせるとはのう」

浪人たちの頭領が巨体を揺すりながら立ち上がった。背中に背負った刀に手をかけ、一息に抜き放つ。

美しく反り返った白刃が、道場の武者窓から差しこむ陽光に反射してまぶしく輝いた。

「真剣を使う気っ⁉」

さすがの弥生も動揺の声を上げた。

「臆したか、女？　剣術とは本来、真剣での斬りあいを想定したものであろう？　それとも、貴様の流派は真剣を怖がる、くだらないお遊び剣術に過ぎぬのかな」

「た、多岐神一刀流を――父上の剣を馬鹿にするな」

自分自身への侮辱なら耐えられるが、亡き父の剣を蔑まれることだけは許せなかった。内心の躊躇を押し殺し、弥生は小さくうなずいた。

「いいわ。わたしも刀を取ってくるから、そこで待っていて頂戴」

弥生が断末魔にも似た弱々しい呻き声を漏らした。目の前の景色が徐々に色を失い、暗く閉ざされていく。

下半身から完全に力が抜け、腹の中がフッと軽くなったような不思議な解放感が訪れる。

続いて、ぶしゃっ、と何かがほとばしる音がして、袴の股間部に濃い染みが広がった。

「はあぁぁっ……」

弥生は思わず目を閉じた。股間から太ももにかけた生温い液体が伝い落ちる感触がある。

ツン、とかすかに匂ってきたのは、弥生自身の尿臭だ。

「はははは、こいつお漏らししやがったぜ！」

「おいおい、作法がなってねぇな！」

手下たちがいっせいに嘲笑と爆笑を浴びせかけた。

「くっ……！」

大勢の男たちの前で失禁してしまった屈辱に、弥生は唇を噛み締める。

さすがの気丈な美少女も、泣き出したいほどの恥辱を感じて全身を小刻みに震わせた。

「耐えきれずに小便を漏らしたか。まあ、おかげで陰戸を濡らす手間が省けたな」

「な……に？」

一瞬、タケミカズチの言葉の意味がわからず、弥生は宙吊りにされたまま眉をひそめた。

「頃合ということだ。喜ぶがよい、弥生。儂らの手で女にしてやろう」

こちらシリーズ 読み 試 くるかっ 今々!

「えっ、おん、な……？　ひっ⁉」
ゆっくりと近づいてきた触手は他の触手群よりも二回り以上大きかった。ヌメヌメとうねりながら、赤黒く濡れ光る野太い触手が弥生の股間にあてがわれる。
反射的に腰をよじって逃れようとしたが、両腕や両足に何重にも巻きついた触手で拘束されて、ほとんど身動きさえ取れなかった。
わずかに動く腰を右へ、左へとひねるが、野太い触手は秘処にぴったりと張りついたままだ。
（駄目、逃げられない――）
弥生の胸に渦巻く焦燥感は、絶望感へと変わった。
このままでは異形の触手によって貫かれ、処女を失ってしまう。
「もう一度だけ聞くぞ、弥生。おとなしく我が軍門に下れ。敗北を認めれば純潔を奪うことだけは許してやろう」
一言……たった一言、『参った』と言えばいい。それでこの妖魔は許してくれるかもしれない。
「ま、まいっ……」
口元にまで出かかった言葉を、しかし弥生は懸命に飲みこんだ。
たとえ清らかな身体を汚され、命を奪われる事態になったとしても、剣士にとって決し

て譲れないものがある。
父の誇りを、そして自分自身が培ってきた剣への誇りを汚すことだけはできなかった。
弥生は顔を上げ、まっすぐに妖魔を見据える。
「お断りよ」
黒瞳に涙を溜めながら、気丈に言い放った。
「ふん」
タケミカズチの口の端がわずかに吊り上がり……。
「きゃあぁぁぁっ！」
次の瞬間、乙女の花びらを割って野太い衝撃が股間に潜りこんだ。
生硬な柔ヒダを内部へ押しこみながら、ヌメヌメとした感触が身体の内部に差しこまれていく。身体を内側から引き裂かれるような恐怖感と不快感で、弥生の全身にじっとりと汗がにじんだ。
「くっ……ううっ……！」
我知らず下半身に力がこもり、すらりとした両足は筋肉が張り詰めて細かく痙攣した。
下腹部を見下ろすと、表面からヌラヌラとした光沢を発した不気味な触手は、すでに先端部を完全に弥生の胎内へと潜りこませている。
触手は、膣洞の中で他の箇所よりも狭まった場所まで到達したところで、動きをいった

ん止めた。処女膜に突き当たり、抵抗感が強くてそれ以上進めなくなったのだろう。
「い、いや、もう抜いて……抜きなさいっ」
後少しでも内部に侵入されたら、処女を失ってしまう――。
純潔のしるしを破られるギリギリのところで踏みとどまっている状態に、弥生は恐怖感を募らせながらも、妖魔への抵抗の意志をあらわにした。
タケミカズチの口の端がますます吊り上がる。
「――やれ」
短く、残酷な一言が漏れた。
「っ……ああっ！」
ずん、とひときわ強い力で突き上げられた瞬間、弥生の身体の中で何かが切れる音がした。処女膜を破られたのだ、と悟り、心の中に絶望と寂寥感とが同時に広がっていく。
（あ……ああっ……！　わたし、こんな化け物に……はじめ、てを……大事な処女……奪われ……いやぁぁっ……！）
身体中をかきむしりたいような怒りで目の前が真っ赤に染まった。
一番狭い箇所を通り抜けた異物感はそのまま一気に、弥生の膣の奥底まで到達する。
深々と貫かれた膣がずきん、と疼いた。処女を破られた痛みは想像以上に強く、身体の芯に熱い衝撃が暴れまわっていた。

ともすれば意識が薄れそうになるほどの激痛。しかしそれ以上に、醜い触手によって女のもっとも大切なものを奪われ、踏みにじられてしまった屈辱のほうが、弥生を打ちのめしていた。

（悔しい……こんな奴に！）

胎内でゆっくりと触手がうごめきだした。前後に出し入れするように動きながら、軟体動物さながらに全身をくねらせていく。

膣の中がヌルヌルの粘液で満たされ、傷ついた粘膜にまで浸透する。触手の体液を胎内に飲みこまされている感覚が気持ち悪く、弥生は嘔吐しそうになってえずいた。

「うっ……ぐぅ、ぇっ……げほっ、ご、ほっ……っ……！」

しかし触手は、弥生の苦しみなど意に介さず――いや、そもそも意に介するほどの知能を持ち合わせていないのだろう、原始的な欲望のままに動き、処女の膣孔に勢いよく出入りする。

じゅぷっ、じゅぷっ……ウネウネとのたくる触手は粘ついた体皮で処女膣の内壁を強烈にこすりたて、柔らかな先端部で子宮口を打ち上げる。

ただ気持ち悪くて、ただおぞましくて――。

「くぅっ……このっ、わたしの中から、出ていきなさいっ……！　おぞましい！」

ぎりっ、と奥歯を食い締めながら、弥生が叫んだ。

両手両足や首筋、腹部などに触手が巻きつき、ほとんど身動きも取れない状況では、身体の奥深くに潜りこんだ触手を自力で追い出すことなどできるはずもない。

せめてもの抵抗で腰を左右によじるが、触手は嬉々としてうねりながら、ますます膣の奥まで入りこんでくるだけだった。

野太い先端部が破瓜されたばかりの粘膜をこすり、引っかき、体表から分泌するドロドロとした粘液をまぶしていく。

膣洞全体が粘液まみれになり、抽送が容易な環境へと変えられてしまう。

「出て……いっ、て……！」

喉が張り裂けんばかりの声で弥生は叫んだ。そんな彼女の意志とは無関係に、触手の動きが次第に小刻みなものへと変わる。

知能も何もない原生動物のような外見ながらも、快楽を感じる神経だけはしっかりと持ち合わせているのか。

膣の入り口から奥までを貫き通す動きから、奥に差し入れたまま短く痙攣を繰り返す動きへと――。

「そろそろこ奴らも達しそうだな。初めての体験だろう？　遠慮せずにたっぷりと飲みこむがよい」

タケミカズチが哄笑した。

「えっ、飲みこむって……？　ああっ⁉」
急激に動きを速めた触手に膣奥を突き上げられ、弥生は思わず悲鳴をこぼした。
触手が膣奥を貫き、先端部を子宮口にぴったり当てたかと思うと、どくっ、どくっ、どくっ、と不気味な脈動とともに、腹の底に熱湯のような液体をぶちまけられた。
「はぁっ……あ、熱っ……な、に、これぇっ……いやぁぁっ！」
初めて味わう異生物の体液を子宮いっぱいに注ぎこまれ、さすがの気丈な弥生も悲鳴を上げ続けることしかできなかった。
清らかだった身体の中を汚されてしまった――。
決定的な敗北感を味わわされた美貌の少女剣士は、弱々しく四肢を痙攣させ、脱力した全身をびくん、びくん、と震わせた。

『射精』を終えた触手が、ずるり、と膣孔から抜け落ちた。
つい先ほどまでは一分の隙もなく閉じ合わさっていた処女の花弁が、今は無残なほど左右に伸び広がり、暗い洞窟を思わせるぽっかりとした穴を開いていた。
穴の奥からは、汚らしく黄ばんだ粘液が逆流し、こぼれ落ちてくる。
触手によって注ぎこまれた、いやらしい体液だった。
清楚な処女の身体を汚した、忌まわしい樹液だった。

自分が陵辱された何よりの証を目の当たりにして、弥生はあらためて敗北感に打ちのめされた。閉じられていたものを無理やりこじ開けられた余韻がまだ残っていて、股間には太い杭が挟まったような異物感がある。

「うっ……くぅっ……」

あまりの不快さに、弥生はギュッと細い眉を寄せてうめく。

「ははははっ、いい様ではないか、弥生。先ほどまでは小便臭い小娘だったが、少しは女の顔になったぞ。うむ、実にそそるわい」

タケミカズチと手下たちがここぞとばかりに嘲笑した。

（まだよ……！　わたしは諦めない……から）

股間に色濃く残る疼痛で意識を熱くしながら荒い息を吐き出した。人外の触手によって処女を奪われる、という女にとってもっとも屈辱的な仕打ちを受けながらも、少女剣士の瞳はまだ力を失っていない。

逆転の手立てを探し、周囲を油断なく見回した。

ふいに、倉庫の隅にひっそりと置かれていた一振りの刀のことを思い出した。あのときは見間違いかと思ったが、今考えればあの刀は確かに不思議な『力』を宿し、脈動していた。

（そうだわ、あの刀なら――）

弥生はハッと目を見開いた。

まだ一度しか……それも細い触手を受け入れた経験しかない小さな菊門にとって、妖魔の肉根はあまりにも野太く、大きすぎた。無理やり押し入ってくる肉根によって尻の入り口は無残なほど拡張され、直腸内部へと差しこまれていく。

「ああっ……いや、あんっ……！」

首を左右に振りたくり、拒否感をあらわにしながらも、弥生の尻の奥では燃えるような愉悦が広がり始める。一度触手によって貫かれ、性感を引き出されてしまった器官は、もはやただの排泄器官ではなくなっていた。

「あああっ……い、いいっ……ひぐっ」

慌てて唇を噛み締めたが、よがり声を殺しきれない。

いわば第二の性器と化した直腸を妖魔によって根元まで打ち抜かれた弥生は、艶のある黒髪を振り乱しつつ切ない喘ぎを響かせた。

タケミカズチともう一体の妖魔がそれぞれ腰を動かし、弥生の前後の穴をなぶる。二体の動きはばらばらに膣孔と菊肛を責め、えぐり、野太い器官は二つの穴を隔てる薄い内壁を通して、ごつ、ごつ、とぶつかりあった。

「ま、前から、も……後ろからも……やぁぁぁっ！　こんな……こんなにぃっ……ぶ、ぶつかりあ――はぁぁぁぁぁぁんっ……！」

弥生はもはや息をつくこともできず、だらしなく開けた唇から、はっ、はっ、と子犬の

えっちな試し読みスタート！

ような呼気を吐き出しながら、二体の妖魔の肉棒で身体を串刺しされるに任せていた。
さらに妖魔たちの淫虐はこれだけでは終わらなかった。
三体目の妖魔が歩み寄り、いきり立った男根を弥生の唇に押しつけてきた。
「んぐぅぅっ！」
抵抗する暇もあらばこそ。
ぬるっ……ぬるっ、ずるずるぅっ……ずるぅぅっ……！
膣と尻穴をえぐられるだけで意識が散り散りに乱れていた弥生は、ほとんど抗うこともできず、喉の奥まで長大な肉根を受け入れてしまう。口の中がはちきれんばかりに巨大な肉棒は、張り出した雁首で弥生の口腔粘膜をこすりながら、忙しく出入りした。
「へへへ、俺も混ぜろよ」
今度は四体目の妖魔が反対側からにじり寄る。
今度の肉棒はむき出しになった丸い乳房にあてがわれた。先走りの汁で濡れそぼった亀頭で、硬く尖りきった乳首をさすり、見事に張りきったたわわな乳房の表面を、丸みに沿ってこする。
「ふぐっ……ぐ、むむ……んんんんんっ……！」
口の中いっぱいに頬張らされた肉棒のせいで、まともな言葉を発することさえできない。
おまけに口の中の粘膜を乱暴にこすられる挿送さえも心地よく、少女の性感を揺さぶっ

てくる。
決して感じてはいけないはずの陵辱行為が、弥生の身体に熱い興奮をもたらしていく。
「んぐぅぅぅっ……！　んっ！　んっ！　んっ！」
前後の穴を挿送される衝撃で重く膨らんだ腹を揺さぶられ、敏感な乳房をこすられ、口腔内の粘膜にまで刺激を受けて、弥生の理性は次第に蕩かされていった。
（ど、どうなっているの……!?　わたし、おかしな気分に――駄目、これはきっと妖魔の術よ！）
弥生はキッとまなじりを吊り上げ、自分を犯す四体の妖魔を順々ににらみつけた。意識に淫らな桃色の霞がかかるような錯覚で、全身の痙攣が止まらない。
それが肉の交わりによる愉悦であることを認めるわけにはいかなかった。
認めれば、本当の意味で妖魔たちに負けたことになる。
（わたしは負けない！　そんなこと認めないわ、絶対に！）
弥生の視線を真っ向から受け止めたタケミカズチが、ニヤリと笑って腰を突き上げた。
「っ……あ、ぐぅっ……！　はぁぁぁんっっ!!」
ひときわ強い繰りこみで繊細な膣粘膜をこそがれ、弥生の目の前で閃光が弾けた。
「あっ……ああ……」
肉棒を頬張った口の端から涎が垂れ落ちる。

抽送のたびに、先ほどの触手とは比較にならないほど太い肉雁で秘肉を満遍なくこすられ、じん、じん、と甘痒い心地が子宮を燃やした。
「どうした、弥生。随分と物欲しそうな顔ではないか。そんなにこのタケミカズチが愛おしいか？　ん？」
「ば、馬鹿なっ、そのようなこと――」
あまりの暴言に、弥生は言葉を失った。
力ずくで大切な処女を奪った相手を愛するなど、女性として絶対にありえない屈辱だ。
しかしその一方で、四箇所を同時に責められることでの肉の愉悦は、意識を甘美に霞ませ、弥生から正常な判断力を奪おうとしていた。
そんな弥生をさらなるどん底へたたき落とそうというのか、タケミカズチが下から突き上げる動きは一突きごとに速さを上げ、背後から肛穴を貫く肉棒は血流を増して一回り膨張する。
口の中をこすりたてる肉棒は口蓋の裏や舌の付け根、喉の奥といった口内の急所を次々と圧迫し、乳房を突き立てる男根は敏感な左右の乳首を中心に撫で、性感を炙ってくる。
（駄目だ……これ以上、敵の罠にはまっては――）
弥生は懸命に理性を揺り起こそうとするが、身体中を熱く燃やす初めての官能は、あまりにも強烈だ。

理性も思考も焼き尽くされ、ただ蕩けるような肉悦に全身を浸し、女になったばかりの身体をよじらせてしまった。
「ひぁっ……あぁぁぁっ……!?　い、イイッ！　イイのぉっ……！　こんなのって……ひぐぅっ……うぐっ!?」
切なげな声を漏らしながら肉棒を吐き出す。
まるで想い人にしなだれかかるような格好で上体を倒し、タケミカズチのたくましい胸板の上に両の乳房で着地した。
弥生はとろん、と瞳を潤ませると、無我夢中でタケミカズチの唇にむしゃぶりついた。
「ん、くぅっ」
清らかな唇が生まれて初めて『男』の唇に触れる。
弥生にとって、最初の口吸いの相手は醜い妖魔となってしまった。しかしそんな事実もまったく気にならないほどに、今の弥生は意識を蕩かせていた。
ぬちゅっ、ぬちゃっ……ちゅうぅぅぅっ！　ねちゃ、にちゃりっ……！
ヌメヌメとした舌を口中に差しこまれると、弥生は鼻腔をひくつかせながら喘ぐ。粘り気のある唾液を注がれ、無我夢中で飲み干した。
「んぐっ……こくっ……ふ、むぅっ……ふあぁっ……」
醜悪な妖魔に上下の口を同時になぶられながら、弥生の性感は否が応でも上昇していく。

膣の入り口から子宮に向かって一直線に打ちこまれる肉棒の心地よさが、肛門をえぐるもう一本の肉棒の陶酔感が、さらには乳房をこすりたてる肉棒の熱い触感までもが、無垢な乙女を狂おしい官能の渦に巻きこみ、身体中を灼熱させる。

「はぁぁっ……む、ぐっ……ん、あんっ……気持ちい……だ、だめぇっ……おかしくなってしまうっ！」

妖魔に犯される屈辱を忘れ、理性すらも置き去りにして、弥生は本能のままに絶叫した。

開け放たれた口にふたたび妖魔の陰茎が突きこまれる。

乳房にあてがわれた肉根の動きはますます活発になり、欲望の先走り液を左右の双丘になすりつけたかと思えば、硬い先端部でいきり立った乳首をグリグリと押しこんでくる。

「っ……は、ぐっ……あふぅっ……む、んっ……はぁぁっ！」

弥生は、塞がれた口からくぐもった声を漏らした。

前の穴をえぐる肉棒と後ろの穴を穿つ肉棒とが、膣と直腸を隔てる薄い壁を通して、ごつ、ごつ、とぶつかりあい、身体の中を震動させる。

丸く膨らんだ腹が揺れ、たぷん、たぷん、と内部で水音が反響した。結合部からは触手によって注ぎこまれた粘液が逆流し、こぼれ落ちて、神聖な道場の床を黄白色に染めてしまう。

（だ、駄目……もう、イク……イッてしまう――）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/